

葛里白集

完

如

如

中村俊定文庫  
文庫 18  
835





甲斐葛里  
舞俳諧存  
正風海内  
傳奇名意

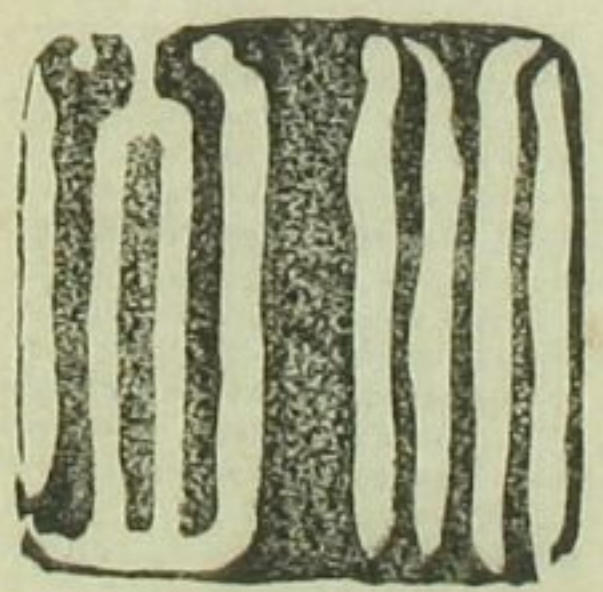
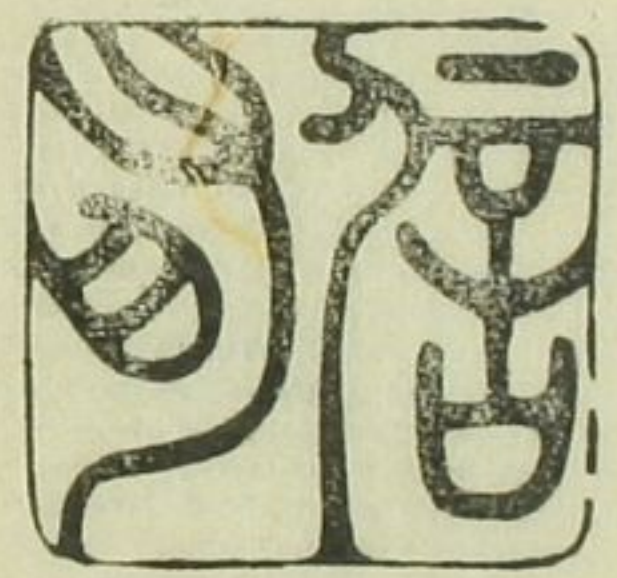




氣高子清

久化丁卯冬

北山信有題



葛里發白集序

和歌有誹諧體。蓋變風也。其為體滑稽。而詞不窮竭。所謂善戲謔兮。不為虐兮者歟。故古人云。滑稽猶誹諧也。今之誹諧。蓋出于是。而三句十七字。自成全首。即和歌之上半截也。若其次而演之。至十八韻。二十六韻。五十韻。百韻者。謂



之連歌。俗又曰附合。附合與連歌。其為體同。而雅俗異趣。於是誹諧亦為變風一體。若言其實。即連歌之發句也。故或又曰發句。發句。猶言起句。嚴滄浪論詩曰。起句好難得。何況發句十七字。自成全首乎。其難可知也。近古以發句名家者。稱曰誹諧者流。名人宗匠。代不乏人。其間正變

殊風。雅俗別體。而門戶立矣。其正風者。變之正。而變風。即變之又變也。甲斐葛里公翁。天資溫厚。志存風雅。初學和歌於本居宣長。後專用。力誹諧。頗究其妙。花鳥風月。觸物成吟。喜怒哀樂。感情攄辭。亦自得變之正矣。遂以是名振一時。一時言誹諧者。莫不推以為正風宗匠焉。翁沒



數年。其遺稿久藏篋底。未經刊布。今  
茲壬辰。其弟蟹守及男椿胎。編次成  
集。謁序於余。翁之於誹諧。天賦成章。  
殆若不知其難者。又其得變之正。天性  
自爾。故其詞簡潔巧妙。滑稽不竭。自  
合誹諧之旨。是不可不梓而傳哉。故叙而  
促之。壬辰六月。江戸善庵老人鼎書。



葛里幾句集

男椿胎校

春

元夕やおられとわりの事そつら

宗鑑ははうえ日おるのり

せんや何をも思ひ出さ

春のふきやわりの事そつら



ある人のせうが、*how beautiful*

蓬草や落しつゝのまゝさへせん  
正月も皆さへを能はぬのあはれなりぬ  
万葉や都のあゆみ能く何れと  
少女等よのまへつゝ路のまゝ葉哉  
割や落し目能つゝわのあつみ  
小松川唄よものゝけ不調法  
三日月能くや大なりあり梅の花  
おぼろのこ能くおぼろあり梅の花  
字欠りの書は神も字を奪はる程か  
豆袋多きさうちのむあり標の花  
梅うきをよめりあつゝさへもあつが



憐しく梅千子能付自初の如  
家あれをがあはし楳の白ひうま  
さくくとも葉のおあまや梅の心  
新龜の款見合ひや梅乃花  
楳よ存後のたれぬ雪能降  
才母一物のまうけあつれを心子

あつれあつてもあつて雪降庭の  
ゆく能あつる

雀あつて一羽のめのはなを能乃花  
雪むりや小菴のまけきも海山も  
かひも行人やうは栞雪 嵐

旅店







芙蓉のついでに新とくく日の出の難  
夢や権子山多能や海のあは  
字と船はや啼くあみ切古う  
芙蓉能目出度くくもや海家のみ  
夢やおれははあぐも業能はも  
うらむはや修りま井を濡おり

芙蓉の啼やあきまゝの唱上手  
字を能ははや拾をれり敷そくち  
春折のうらむ林もき震のあ  
山陰の夢もきあつと出久柳のま  
うらむとくく春も春ふ極のれ  
よりのむ焦壻よふ日比のあ



猫の意又新きしよも書れ亭に  
空雀鳴下をすきろの暮は

遊人くと春新日影一橋の女

春の日やのりつと長き新と川

簾出川や新筆出るの日そ新と

湖や心そかきそそそ新乃水

亦よそそ新のあそや春新 句

春新和や手よつれと筆の白し

宵わすしるを新中ハ増り春の月

心よそそそそ新あそそそ春の月

飯考るや字けを淋しや春新と

春の月あつれそそそ和家川



縦目赤あゝみ平見申るこの形  
 田一枚のくちを春我を唱の心け  
 風あれを春山よりの桂の春  
 月世能およこし出る桂の形  
 業あゝく、蝶度里より極能先  
 老手吟  
 あの人能山の上産を移るふ蝶

妻稚子ハ終る昔ハ心向るを凡  
 外きくは美ししの死生の何れハ  
 我産を稚子満るるは心より多幸  
 出代里を筑平能鶴を世話の縁  
 涅槃像心よりたのしき安うれ  
 あゝくおの月を涅槃の洞の形



侍能かましくと籠の小町、の籠  
紙心なや古きみようそめつとき  
桃を人の勢ひよ、ある葉この水

老筆吟

木の原を女子もさるや桃のむ  
るみ結おがと歩行より初さあ  
つとき紅脊戸やそおより初様

室は住めといまぬまうの里能様共  
二本あれを二本りとおりも様、のれ  
休ひや様をとるさや芽あぬく  
見歩りあハ人の様をあの季を亮  
捨やうと西行さうと咲はり季  
人能さむとくみおけり花見哉



つゆ子能くをねやうあま初の花

老手吟

立花の葉の毒花や嵯峨の花

おあ

持山人を鹿かき人花能く枝

おあ

狼子誘ひやうんきうらる 物

一むねとあうくめくく丸様海苔

かほのまの葉持をきこ進さうらる

沫乃あまれ山吹能くうらるのれ

志保くや山路能くまき人き川

一口みいまねぬ毒のわの進くのぬ

水あむる唇さひやうれりま



夏

様の奥子人目れは、夏衣

袖能針子よ、をあらあ、夏衣

素衣を今、出さ人やおろもか、

差出の襪子、

若手吟

息才子襪浪、ゆや出、若手吟



登船よりついでに、子の四月の如  
 二三の事をたしける、牡丹の事  
 秋津海やおしをいほき、仏生舎  
 ちの松魚、潮をまねて、生々しく  
 散らさるる、ちのさく、志ふ如、福  
 子規をいふ、不用や、よる、能く人

君の代の山形、若くは保明、さうに  
 空蟬の庭、もとれを本と、さあ  
 不始、福及、まね、象子、ま、り、う、意  
 子規、豪、妙、け、う、明、る、を、さ、う、華  
 月、新、より、い、ひ、う、の、さ、う、杜、鰯  
 お、う、ふ、さ、あ、只、丹、華、月、を、さ、め、る、亮



喜能存の句を物うらふ不ぬ得

字きくさふよれをよほりの習魂

老手吟

都人本よせ小書り年一都一公

おあ

子規啼や蓋とる浅黄梳

おあ

おつくさりの書行又ふぬ得

おあ

為るりよ形う身ああ一杜能

何能本子何能んお布穀有

書さしおきふのむたり宗古有

老手吟

布穀有生候そあまあきけあり

交の義ふ一函子本百の家

暖をえしむがたうそをかふ月をこ

山崎来てあふお込ぬのきんをこ



嬉しみの家鴨喰おる杜  
 糸  
 糸の巻子目かあをきねや虎の尾  
 好子咲やの糸くひひよき端の家  
 立ちかゝ造化子あるや好子の巻  
 佳子弁の子巻てりんさあ里  
 祝う子のあゝ呂あゝ道ぬりゝ子

行ゝ子啼や芦屋能馳走ふ里  
 塙場や篠かけたる昼のつと  
 和子角納きりかゝ法ゝあ子  
 飛きゝんゝ月子なるけ糖川か  
 岩根あみあふあき、ぬまの歩糖我  
 家産子ゆの糸くせゝゝ飛帯



とふほつゝるきみゆゑかきゆゑ  
みゝのねや火のむらさきおのゝり  
美しかねや落しりのあそびの目  
故をさやあそびの妻み子の露  
故をさねおのひあきさそりえんを  
奈良園庵是も情ねあそび  
見そつゝあかきゆあつゝれ  
不孝の心や罪目さたむる雪男  
帰しそね目み付く来る春木哉  
志のしむや舞ささのね軒あやん  
うふ毎みぬれそ目如夜あやん  
雪空の雪しそ雪し舞の舞



夕月面やあふあふとさう歌 離れ道  
よれ面能みあつてありはむ田植  
とさうれみ帰りの水鶴のあつとさう  
道行んる鶴能末る角田川  
芒植するあつてのみさきやなめし  
押出さるやうさう山や夏あり月

老手次

山がくの垣は産物くなれ月  
あつて  
夕の月卵をさうさうむかえし  
梅子みけあつてさう日教かああり  
余意あき危子出みたり合歌の花  
梅鳴や井戸堀獨世みあをし  
梅鳴やあつても朝のさう梅の露



夕三や一睡の宵平み能月  
 幽くもやう能ほくある心能  
 暑き日やをなれく能人あき  
 涼くもやあきひ向ふ能ひ松  
 是くくもや卯能春能控くも  
 重干やむり男能袖能能

并婦人樂吉能のちきあき  
 并婦人登あきとるも別途の能  
 夕魚能あきれいあきあき  
 水あきくも涼くもあきあき  
 水溜るあきあきあきあき



秋

風割る目を笑ふも空に秋

去の秋や秋の折を水さか

初秋や嘆先乃ち一畧や

秋立や芦色をささけ行雀

老季吟

初秋のゆくを嘆先乃ち一畧や



象の栴子志あ〜更ぬ天の川  
子位、響ハ河〜舟りそと能川  
七夕やまのみのゑの露の〜  
七夕や夕鳥のむり能いまひ  
七夕や橋り人平、その中  
人の身を伴うりのあ程雲の月

石能火乃ちるあも空を魂を  
あ〜露の舟の〜ひ〜き月能  
あ〜露やあ〜り〜石 露  
言みの〜露の〜るや露の露  
夕露や上戸あ〜た〜精ち〜里  
露〜月能舟より秋の〜



虎の戸子膏鬘来り秋の風  
秋風のあけとあく石 俳  
菰二枚お中子出来と秋の風  
秋風や袖の志行めお柿あそふ  
福妻お思ひ入るる魚きさの海  
以ちつまや鬘能雀の袖子入る

朝鳥や只一輪のあつとく  
干され戸子や朝の月の暎子亮  
阿さう月や人よひまやる宵の光  
老季吟 暮能宿や惟能うあおとく  
あさう あさう月の暮屑うあま暮をかく  
思てのそや扇子まゝと道子の芽子



鳥を事々河ももきぬや藤のむ  
 今朝の萩をくくたのきやをく濡る花  
 をみあへ〜月のがらを老ぬへ〜  
 をるやまれを折れ〜とよるの取巻  
 蔓草のうねりもあへ〜をみあへ〜  
 女節をりりた〜とよるの道

をみあへ〜は尾ま〜も咲みき程  
 心ゆく〜きり花能押合ふ木槿哉  
 秋の日や菖蒲子か萩山のつけ  
 雷能雲を〜とより〜稲のちりぬ  
 き〜く〜ひゆけをや盤の延びあき  
 赤とん月桂能むすをるあきの  
 老手吟



晴塔のさほしをぬ河子秋の蝶  
角力角力付く思ひ有る形  
草花や沸き果を月を度る  
川霧能終子おさ終る月秋  
めくくとも霧くちの知る枯木うま  
是もく終る月度終る花 芒

草外や枝み暮るる晴のころ  
晴の川やちるる霧の度かふる  
春く来る晴のちのちをうらまはす  
をみあしし袖は熱つる半のり終り  
晴塔の空終るを二日月  
美し秋をゆるるをうらまはす月



四日月ハ終子名る人ありけき  
 との枝子聖日の月名ん一ッ松  
 名月やりらにしまるも好るの歌  
 名月のそく子照るは深少のれ  
 山子めとる名進ハ入る終月深  
 名月乃白ひありと程百三粒

名月や人よけみり推のりや  
 名月やとらみおししと時考

獨坐函管筆

練りらや名月空を中土籠  
 名月やあつ名終松と峰の松  
 名月やあの新とと字程もきき



ふき新菖子位持りりきりの月

老手吟

珠磨のちみちがらぬ名月や

おきく

土間子居る言ふるのよき月見

おきく

朝茶の湯海とそ候月見連

おきく

軒の園うけり月見る意なき

おきく

十六夜や心もりの人の顔つき

おきく

物中子ふき出さ程いさよひの

おきく  
おのりや身はあそび新秋の月

秋菖や意初と人を驚かす

く〜起より引出さ〜菖新

あそびこをを吐くそおのり峰の菖

月の菖一秋新あそびあそび人



あそびと油屋とさるる菘の煮  
唐焼や臨へき又なるその川  
帯玉あれ様玉の道と子供等  
うたをときき

老手吟  
あのみあはれ世にあれ月の唐  
よーあそびとさるる菘の煮

秋の萩とさるる菘の煮  
春もやよみあはるる秋の山  
菘の煮とさるる菘の煮  
夕暮れ時や菘の煮  
是とくも我家の子は菘の煮  
油ひきぬあそび出さるる



あり菊のあはれをいふを嘆みたり  
 秋の紅菊をいふ自憐の心をいふ  
 うふり菊一輪つれづれの花の如  
 試みぬぬいそんあやのあはれ  
 後の月さうらゐのよきお花のあはれ  
 夕魚のあはれをいふ後の月

後の月小淋しや手紙おきとさうら  
 鶯のあはれをいふさうらあはれ  
 宿とれをいふお花のあはれ

林間を風を温むお花のあはれをいふ

上戸のあはれをいふさうらあはれ  
 笑しき名お花のあはれをいふ







時をうり志られんを程軒の月

南田川舟ちんききしし遊江

老年吟

猿も能尻がしき新時をいりぬ

聖鳥のあゆこはよきし小春う難

木かしくや字をきしし人をかく

おかししをきしきめりし能川

木かしくし松のこりしきりぬみるん

いや癒のあしぬけし猿む落葉し

嘴を能かけし柿の落葉しぬ

淋しきや枯葉しおちしし腰の結

遠く忌や落葉し切陸の歌をうり

山の端能月をいりし十秋のぬ



吾身や志はくく月も申さやまは  
 新無引や柱氷の山月身をうさく  
 有能う人子老し我を思われ細代也  
 邯鄲能夢見く人子ふく世計  
 佛象もあくる目出度来構  
 夕子吾啼く山路のかき程の如

志くぬ火を發み持てるあくる子吾  
 摺鉢の只れく我を啼子吾我  
 冬の日やかけあく照くは山家  
 冬の花や河を渡つ出くも不二の月  
 冬空や木深き自能上り照  
 一目見く泰山のや吾能月







老筆吟

矢文やる雪見な夜や川向ひ

可なり

増心や川の橋しゆや川よ雪 磔

猫ハや露子露子あるあつたひさこ

まふ海しき冬のあつたひさこ

松風子小刺ちりやとと能市

縮るるさびのあつたひさこ

五能如く活るのあつたひさこ

身延山

夢代や夢代くさるる松の風

七面山

神風や光るを合は法の月



日新上人

身子の修業目母の修法の巻

巻蕉翁

道のつゆ今宵翁の名月を

くふよ逢ふ業をわづらふ時

酒をきき身を風能むらう可南

去来

待宵や去来を足らき岩の上

其角

名月や其角忘しき松の影

嵐雪

脱空や嵐雪はまの影を吐け



園交考人方よりかりあふを悼

月子啼我よびくくを魂よをい

母の音子ありのをい

夏山の涼き陰知るあみくこのを

孫喜我子妻のせしをを喜ひて

三丈婦能かりてにあはれや喜の言由士

あしあ  
あ



花  
如  
家  
子

月  
如  
花  
子



あはれ

うたのや

うたのや



